



十道發蒙

全

ヤ 9
405



保赤牛痘菩薩

西江月

大慈大悲發願
衆生濟度為心
從來保赤法如林
牛痘法是甚深



錄於...

春雄

引痘要略解叙

桑

田主高名和字西爵以醫為業性慷慨倘

億者歎曰羣教之所以力主擲口志之麗而

億然施以扁之術而百不失一志幾何矣夫醫

者仁之術也以治病活人為職術者利之

德者有遭五中之一失則為良人之不幸乎

為醫之不難字不難易係于己不望則德



千人苟謂不熟而殺人必獲罪于天也必矣
嗚呼我徒以少學之技誘人之性者亦何少
近世瘡瘡之儉尼醫之能治者雖究其術而
其變不啻生死和半亦甚十矣七八學之可一
字在否唱種瘡法者身經至簡至易而百
失一我嘗得此法施知兒有年多至婚嫁之
中而收功後子更學一誤頃為弟任小山歸成

所刻清却瘡引瘡新法全書其法甚精至矣
盡矣唯憾其書難通故耳故

皇國之人未始不為保赤之良法極其誠之忘
之志可歎之甚也矣於是採之要以解之且加
以私見與經驗以國字錄之欲遍濟世人傾
造施治使志子遊危就免竭厄全生濟于壽
域是世化所以欲存天地生靈之意而塞彼

仁術之貴也仍示其解甚余披覽之有所說
 實法畜之古法所不密於也且其去常用節
 亦足見其意矣心去余曰善矣速所誌刺
 刺者抄寫之常應海世入可以故王六之嬰
 硬也美乃以之為叙

昔嘉永二年己酉六月

化伊奇筒井憲茂



膿潰	危険	死亡	徴候	自然痘	種痘噴鼻法	種痘發泡法	種人痘刺法	牛痘法
通常總身許多膿疱を發せり臭惡あり	三人中一人を必危殆をふす	大率六人中一人或は大都小流行時大率二年中より者三人餘小至す	一箇に傳染病あり通常劇烈あり多痛苦忍べり	種痘噴鼻法即ち下記を行ふ法也	傳染性あり通常善性ありやいどを特とす危険をふす	自然痘此れ皆善性なり然るも全身小顆粒を發し經過速速ありこれ牛痘不及び所あり	三百人中一人死を然れども予此法を施す	慎てこれ種を時を必善良安靜絶えず嫌惡なき症あり或は少くあり自然痘を免るべき疑あり
時々咽喉腫瘍或は癩癰腫を發する変わり	十人中一人の悪症を發せり或は傷癩を發する変わり	大率三十人中一人死亡	種々危劇乃症を發す	稀あり種々新研嫩衝膿潰甚き変わり	五十人中一人のやもまの變異症を發する変わり	三年間一年小七八十人小施し積で數千百兒小至るといふ一人も險危死亡見あり	ある変わりこれ衆人知所あり全く謹慎し多行人ゆゑあり	絶えず危劇の症あり変わり
種處一疱を發するのみ		決して死亡なし						

大山 諸痘險易表

中

吉

上々吉

時日	注意	救療	時醜	餘患
病の長短劇易小 從て各異なり	諸般に預備多 く皆驗なり	病中病後多 適宜に醫治 要す	肌層顔面依痕 斑文を生ず或 時形小變す	諸部の潰瘍皮 層病眼病盲聾 等を殘す甚 多し
發熱見点異同 あり或は發せぬ し多苦悶を發 すなり	寒暑を避す且 腦病眼耳病 變ずるなり 防ぐ	醫藥攝養關 なり	目小入り易し 險重に眼疾を 殘す者あり	其毒鼻中より 入る或以て咽喉 病眼病を患ふ なり
早き六七日 發し遲き八九日 漸く發する 者あり	食養醫藥に注 意初生兒或は全 身諸病生齒の期 を忌む	或は小便淋瀝 はるなり防 燥劑を用ひ べし	三四十人あり 一人は麻面 為す	腕上種う所 腐爛し久し 愈げり
先前痘小比 れを經過至る速 き貴々異同 あり	嚴寒酷暑を避け 或は老人妊婦を 忌む	驅毒排毒乃藥 を用ひ腸胃を 清淨す	全身癩痕と殘 す者甚稀なり	病後患症 發する甚少し
時日甚少 他日一般流布 時貴亦有る あり	常則に隨て身を 保護す 切注意す	醫藥服用 清淨す	醜狀を あし	一切餘患 あし

目錄

- 自然痘や牛痘の善惡格段あるに比例
- 總論
- 牛痘を施し後必再感せざるを
- 自然痘は流行を待たざるを過あるを
- 牛痘は法を以てのやうに良法を始先に行は難きを
- 蠻夷は法を以ての益ある者を採用するを
- 牛を賤畜ふ非ざるを
- 世小蘭醫と稱する徒は過多を成見て牛痘も其類ありをと思ふの非ざるを

○牛痘を信ぜざるは不幸の人あり多勸むる仁の術あるを

○世は牛痘を信ぜば人の言さるるをあるを

○世人牛痘を種多むとすは必ず其の害と擇べざるを

○昨冬以來千余人實驗其例

○種痘書目録

○真牛痘經過其時日

○小兒養育其網要

○溺死其救急法



牛痘發蒙

總論

桑田和著

○牛痘を西洋新發明其良法ありてあるは未痘は嬰兒小
施しは其流行の險痘小因る或は麻面と為り或は
死亡小歸るは免れしむる者ありて天文曆算
等の法は年月を積みて後益明ある事を得る類はか
る良法の新小四大洲流行し嘉永二年終小本邦小將
練せむる實小世人乃大幸ありは其後どのの良法
も其始む人小怪み疑はるる行はれ難き者も自然
の勢なり孔孟の教とりども其然るを免れず仰

牛痘發蒙

〇一

き望むらくはあは法早く好善の君子の助成得て速
小國中流行し世上の險痘全く絶え以て生民を蕃
殖し上天好生に徳を報せむ事をあは區々世人小
望む所あり

牛痘成施して後必再感せざる事

○牛痘種を去嘉永二年洋船に齎来りて其を施す所未
多かりしを施してより後未いくばく年月成るも
過ぎたるふ世人喋々として再感の事成言ふ者も実小
聞見する所ありと然るふゆらむ多し心中小牛痘は
甚輕き成見て以て痘ふあらむと一日後恐らくは再

感するの患ありむと久るより吠聲の徒よき小附和
者起る者なり蓋牛痘後必再感の患ふし西醫ポルト
スニツト曰く和蘭あく一萬五千人小牛痘を種る其の
中五千人小を種後人痘を種る試みしところも感む
る事なり其の後險痘流行の時も共小傳染を免れし
りと漢土小於ても嘉慶十年二年我文化よりあは法行われ
こ種成小兒小種を試みし一人も過無く再感せざる
者なりとこも小他の種痘法を施せども感むる者無く
中患痘の小兒と一室小同居遊戯せむれを傳染せ
ざる由を道光十四年三年我天保まぐの書小載せられたる

引痘略小見えれば其の二十七年間其經驗を以ても
 信ぜざるは其餘四大洲中の經驗いづくも其知ら
 ざる時を再感あきと疑ふるも夫痘を本外来は
 病ありと天稟より出づるふありとせられ痘の傳來せざ
 る以前の人にはあまは成病せざると今も猶紀州熊野等
 の如く痘疾患ひざる地方あり成以て人の天稟固有
 小非ざる事を知るべし多し人身小感受性ありて以
 て痘毒を感受するはみ故小牛痘を感受せしめず特
 性成脱けしむる時を爾後必流行痘小感受する事無
 し多し人バ鏡小火葉成装し信業を下し時をかるも火小

感ぜ故小あまは火繩を接し一撥せしむる時を火葉
 小感受性已小謝しと爾後以て小火繩を接しむるとり
 必撃發せしむる痘もまたかゝるごとし一撥せしむる必
 他病小變する事無しまた花戸の術を極めず草木の
 花を早く開けしめざるも花の真の花ふれば後接の期小
 至りて再花を生ずる事無しあまは開花は機性已小謝
 する成以てありと多し痘を外来の病毒より花は本来
 固有の物ある小異なり故小花戸は術を以て花成は
 其者も其の本衰ふる事あり痘を外来の病毒ある成
 以て早くその感受性成脱け去らしむる時をその見

健全ありあくおれ理を推し考ふる時を種牛痘の後
必再感は患あきと害あたと事已不明なり故小今家
人小約は牛痘後再感は兒を伴ひ来らるめら必とと小
撞謝まへんと

世小自然痘の流行を待つべしといふ過ある事

○世小自然痘あり種人痘あり種牛痘あり自然痘を安
危定まらむ殊小悪性は者流行する時を死亡甚多し
故小種人痘乃法起るあき世は良善の痘種を採て未
痘の兒小種うる者ありあの法甚善といふどもも
能痘を發する事ある時を未萬全の法といひがと一然

る小時あるの如去嘉永二年和蘭より牛痘種を將來
志く初免て萬全法を得多り實小世は鳴室やいふ
屋一史自然痘を火の原を燎く小同トおの患乃大小
實小預め定めが多し種人痘を竹芽を束ねて炬と為
まその如しま害ある事あり種牛痘を燈燭を照する
が如しおの器は製周密ある時を必患害ある事あり
氷火の用大しと世小一日も無くてもあるまじき事
おの自然小任せぬれば大害減るまじき事あり況痘毒をや
然る小世人かくは如き萬全の預防法を為さるべき今日
晏然とく目送るを以て望まると為し自然痘の流

ナニコウカ

竹を待の紙以くあはれ天命不妻まるといふ人ありとて
 るあ、無知の疑りとり入る者ありて敢て天命不妻まるとい
 ち何うぞ若自然痘能流行不任せ其の死まるとも生ま
 ぬも天命ありと言ふその陰瘡不罹りさうむ不患ど
 業を興えざうむり而して其の人必其紙興ふべしこれ
 藥の萬一以く生路不挽回まべき事あるを知らばあり
 而して萬全の良法ありとこれを預防まべき成知ら
 ばるも無知の疑りあり其病能危険ある必生路無く
 救途無くして後凸む事能得どくと挽回天命不妻
 まるも不或る盡さる事ありむ成恐る況萬全の

良法あり成行のむしと其の児を陰瘡不死せしむる
 者堂天命ありむ故不瘡能自然能流行不任まると
 りふも必過あり

まるののやうは良法も其の始
 妨ありと行のむしとまき事

〇まるく人心不先入の主と為り多る事とわまて改
 めがさきめあり多とへ猶鮑魚の肆不入りと其の
 臭を知らばるあど今丈蕃薯能如き人皆喜び食
 ひく日用を資け凶荒不備あるの功あるも其の始の毒
 ありと言ひく世不其の道ばりしを享保年間

明君台命を儒官（おのゝみん）下し（くだ）其功（そのこう）用を誌（し）さし先遍（まは）く（く）とれ我
布告（ふこ）し人（ひと）皆（みな）とて信（しん）ぶる事（こと）あり今（いま）亦（また）
里（さと）々（々）其始（そのはじめ）さ（さ）がり人（ひと）疑（うたが）ひ怪（あや）み（ま）し変（か）をも知（し）らざ
於世（このよ）とあれ（る）も

明君（めいくん）は至徳（しとく）あり故（ゆゑ）ふ（ふ）この牛痘（ぎゅうと）の如（ごと）きも世（よ）亦（また）好善（こうぜん）の君（きみ）
あつ（あつ）と或（ある）と常州（ちやうじやう）及び西國（さいこく）二三（にさん）の方伯（ほうはく）諸君（しよきん）の如（ごと）く（く）
其國（そのくに）中（ちゆう）亦（また）布告（ふこ）し（し）民（たみ）は亦（また）不（ふ）從（じゆう）ふ事（こと）猶（なほ）單（だん）は風
小偃（せうえん）ま（ま）の如（ごと）く世（よ）上（じやう）は陰痘（いんと）全（ぜん）く絶（たつ）て其（その）患（ゐづ）害（がい）の景況（けいけい）
殘者（ざんじや）が亦（また）り（り）と世（よ）の人（ひと）豈（あや）當（あた）時（とき）牛痘（ぎゅうと）を勸誘（くわんすい）せる人
々の恩惠（おんゑい）を感（か）せ（せ）むや亦（また）其（その）積善（せきぜん）の餘慶（よれい）進（しん）く子

孫（そん）亦（また）及（およ）ぶ（ぶ）べき者（もの）なり

蠶夷（さんい）は法（はふ）も其（その）益（えき）あり

者（もの）は採用（さいよう）する（す）べき也

○世人（せいじん）或（ある）と牛痘（ぎゅうと）残（ざん）以（もつ）て蠶夷（さんい）の法（はふ）と（と）も亦（また）禮儀（らいぎ）非（ひ）儀（ぎ）と
る者（もの）なり然（しか）れども蠶夷（さんい）は法（はふ）と（と）も亦（また）其（その）益（えき）あり者（もの）
は採用（さいよう）する（す）べきと人（ひと）は挑燈（てうてん）豆袋（とうざい）の如（ごと）く亦（また）餘（よ）ふ不（ふ）敷（し）
る亦（また）小暇（せうげま）あり亦（また）茶（ちや）の如（ごと）きも阿魏（あゑい）底野（ていよ）迦（ぢや）等（とう）漢人（かんじん）の採
用（さいよう）する物（もの）も亦（また）少（せう）から亦（また）益（えき）我（われ）を中國（ちゆうごく）と（と）も彼（かれ）を蠶夷（さんい）と
する者（もの）亦（また）均（ひら）く尊（そん）内卑外（ないひがい）の義（ぎ）ありて必定（ひつてい）名（な）あり亦（また）非
也若漢人（わくわんじん）の稱（なづ）する所（ところ）を以（もつ）て亦（また）礼定（らいてい）免（めん）ば日本（にっぽん）も東

牛痘

六

夷傳いん小せうの事ことを免まぬれず善ぜん本朝ほんてうの制せいを以もつて世よに漢人かんじんも
 ままの蕃客ばんかくは列りよくふありしは牛痘ぎうとの如ごときも既すでに漢土かんどに
 行ゆく時ときを推おしおづる事こと漢土かんどにありしはとて人ひとびも
 彼の跡あと跡あと丁香とうきやう等らは如ごとく均ひとく漢土かんどに法はふあり善ぜん其そのの既すで
 不信ふしんせし漢土かんどに保たもてん壞夷わいの中なかに算入さんにゅうせし時ときを
 内經ないきやうの説せつ傷寒きやうかん論ろんは方はうとて人ひとどもも漢土かんどに法はふあり況いは
 牛痘ぎうと法はふを其そのに貴たかし事こと挑燈てうてん豆袋とうざいは一用いちように供まもるべきは
 小せうありしは永ながく世よに陰痘いんとに絶たせし功こうあり時ときはとれ
 哉や野人やじんは地ちに滑うるとて人ひとどもも可うあり
 牛ぎうの賤せん畜ちくは非あらざる也なり

○世人あいに或あるは牛痘ぎうとを以もつて賤せん畜ちくとす得える物ものや一ひとは牛痘ぎうと
 貴人きじんに施おこす人ひとからせし者ものあり然しかも漢方かんはう中なか
 小せう牛ぎう黄わうは未いまあはれ貴人きじんに奉たごらざるは戒かいに聞きく事こと
 且かつ態たい膽たん犀せい角かくとて貴人きじんに説せつに聞きく事こと推おし用もち
 小せう適ていはる小せう至しはる牛馬ぎうば最さい貴き一ひと殊こと小せう牛ぎうを大宰たいさいに用もち
 天地ちんてい宗廟そうぼうを祭まつる小せう用もちを本朝ほんてうに於おいて靈輜れいそに奉たごる一ひとむ
 其その時ときに牛ぎうを五ご位いに叙よせし事ことは制せいありしは外がい漢土かんど
 天竺てんてく小せう牛ぎうは賤せん物ものやせざる也なり其そのを多おほく用もちふ事こと
 ばるは以もつて其そのを奉たごる事ことあり

世よに蘭醫らんいと稱あやうするは徒とに過あやまち多おほき也なり

牛痘亦然類ありと思ふが非あり也

○世小蘭醫や稱するは徒に病を癒すも小方て實に過多
 一然れども過をせし人乃拙きも因循を以て其の學
 此羅めりたりむその過りて以て多非せむせむ漢
 方家といども過あり也あつたは世に過りて見多
 せし方故廢せむを嗜み懲りて食を廢するも同トそ
 の急食して中噎び多食して多同しむる食の罪あり
 世小醫と稱せり然る人豈悉其之道哉會する者あり也
 大率耳食旁聞不出於口以て漫小阿所吐酒石等は劇
 藥は輕用するが故に世に過多の人多きを必然の勢也

て猶漢醫生は烏頭瓜蒂甘遂大戟等は漫投するが如く
 中世に於て下ある者も從來用わる所は漢方中漫小
 茅根蒲公英等の一二味を加へるが如く蘭方と稱する
 けみあるものもこの道藝にけり徒に有るものも清
 中の蠱不同とて終ふその道を害するも世に方あり
 變ありたりそむなる世に人乃悪きはくその道の罪小
 非むたるといふ儒生の濫行も孔子は過小非を備後
 能破戒も釋迦は罪ゆる非けりが如し牛痘を然るも
 ありたり類ありありむ世人能く玉石を分別する一
 牛痘を信ぜばよく不幸な人

あてこれを藪ひ仁術あり

○交瘡をあるは河を渉る者不譬へむ小瘡は安危の狀
 甚明ある交牛瘡を評論めて橋を過る小同く自然瘡を
 種瘡を或い安危のりく渡船小乘る小同く自然瘡を
 危き者多く一多河を馮まると同きあり世に平全の
 牛瘡は信ぜざし多瘡は子成瘡患小失ふ者も替者に
 河小陥る小瘡くある小牛瘡法を説き亦其者も替者
 張導きて橋小就うむる小近くある瘡を拒み妨る者
 も替者の橋をこころむとまると見えて欺きて河小陥ら
 るむる如し瘡は功器のむどや故小區々竊小牛瘡

法を以て己乃任せし一收り及々せし多これ勸め以
 世間の嬰兒病保全し人民を蕃殖し以て國本は培
 老多上天好生の徳小報せむや故小常小時熱は順
 逆は揆らむ以多身小入らげむは瘡為一敷るれば疏
 せし已逐ふま瘡は厭はむ以て傍觀は人小瘡は愚衣目
 せし瘡小ふま然れども吾が一片は老婆心の望む
 毀譽榮辱は上小在るむして偏小仁術を全くせむと
 する小ありわの小朋友の評目一度あくるて遇はざ
 るも瘡は子の將小流行瘡小感せむやまると見えて過
 るこれ勸め絶しそれ成し多瘡小感し多瘡患を

免れ一免は必北は友小益あらむあつて信ぜらる
者る目目無言の不同ドら禮と交を絶つと以人をも可也
君小捨てしまふ然りかくは如くせば必北は君小忠
あつむ着るぬ儀拒む者らるばはは君小不忠あらむ
父母善信すむはは子小不忠あらむと故小他交を
抛下し多ら禮を苦勸しはは信從せざら者小身てわ
或は交を絶ふあつたらは君の癡疾は致す所ありと之
を毛あぬ儀世人小施し多らはは嬰孩を保全せむとま
るは情火の方小燃えむとまら小喬くして自撲成ま
る事を得らる者ありはは信ぜらる者をして必信せ

志ありむとまらるを常し多功あまらるゆをわきど吾輩
從交まら所は醫を仁術あり以のんぞかくは如き良
法ある交を心小知りぬがう纏小一身は禮を受けむ
事を恐ぬる世の嬰兒を陰瘧小死せしむる小悲びむ
吾の心善至誠あらむは終小人心は感動し多らはは
は專行しぬむ交を企望まらぬが好り
世は牛癩を信ぜらる
人の言まらるぐ好る事
世は牛癩を信ぜらる人小淺深あり曲直ありてはは
言まら異あり大率はは言ふところを曰く史癩瘡の天

稟より生むる人力を以て除くべき小あらず故小これ
 を神所為の以てあれ豈牛痘を以て除くべしや
 且痘を全小發せ然る小牛痘を種う所小生
 ずる時を必他物あり多痘小兆トあんと能く痘毒を
 除くを得む今若牛痘を種る多むむ後まに流行
 痘を感發せば衆人小嘲を招き且變あき小病を索免
 狂おて兒童を苦むるや以て者好り多之再感は患ふ
 べきは持の毒隱伏し多他病小壞せむも測り難し幸小
 無事ふらむ或は牛毒を貽さむ且瘰癧小牛痘を以て
 本邦人小施する日本を以て瘰癧小化し人を以て

牛と為る小異あらず且四里に神所居む所牛の賤物
 ありあんとせしむる採れる者衆人小施さむ多と之
 持て法の高妙なる証し親くも世小蘭醫と稱する
 徒は病を瘰癧する小過多きを患ればあは毛生る信ト
 難し若幸ありて善好るも其の是非を知りて忽
 小とせしむる新毒を好む小似あり且其神所為を
 見ると小未痘の兒數人を誘ひて其の家小羣集し一帯
 聲四鄰を驚らす今嬰兒の平全を憂ゆる小親戚近鄰
 小信せしむる変を為し強て肌膚を痛まし先て牛痘を
 種る多むむ後小他の病は為小夭亡する変ありを

遺憾必大ありむ且貴人其身不在て無事其時小其
肌膏小對刺するも居下の悲びがさき所あり如し
今日其妻妾を以て多きなりとこれに天命小委して
自然痘疹流行小任せ善い不幸にして夭亡せむもそ
を世小ありぬるひあればあき哉因縁其所為小歸せ
む此みと令世人の言ふ所大率かく其如くあるを以て
二三退儒の醫を生ず曰く牛痘の法果して良ありば歳
朔の久き紙經て必終小行ひきむ然るも我其信せり
斯者をして強て信ぜし先むとまらる石田を耕す小
似多し勞して功あり枉者て賣名射利好奇其名を取

らむ且人其牛痘を信せざり多し其子を險痘其為小
失りむも吾の聞る所小非也然るも惜むべきの暇は
貴しきをわく歩を運びて信せり人其苦勸し勉め
て身小入らばり其終を為し以て世其嘲を取らむと
愚とひ又厚しと大か世人其言ふ所ら其二般其外小
出づらばり時を以てさるる如く其辨せらるべし○其
痘疹の微毒と同一人の受性小感ずる外來其病ありて
天稟其固有ゆらあり故小外來其牛痘を感ぜし如
て能くとれ其除くべし痘疹常小全身小癩其然る小
牛痘も多し其種う斯處小其生ずると火氣有用

此燈燭とうろう不こ點てんトて一室いつしつを照てすの如ごとく自然じぜん瘡そうは毒どく發はつ不こ委わする火勢かせいの熾さか盛さか不こ任ますら如ごとく火かと同どうト火かが
れ堂どうも其その利害りがい甚し異いあり若ごと牛瘡ぎゅうそうを種う名なする不こ周しゅうり
て衆人しゅうじんの嘲あざわらを招まくる以もつて流なが行かうは險けん瘡そう不こ其その子こを失し
ひむら郷黨きやうたうは譽えいを得えむ者ものの命いのちを毀こ譽えいは為な
ふ賄わいふらむらむら不こ平生へいぜいは行かうを謹しんまら不こ毀こ不こ遠とん
げらの譽えいを得えむは方かたありむ丈さか破やは至いた極ごくは物ものありて
其その法はふは方かたはつらげらは或あるは不こ意い不こ放はう發はつ一いつ或あるは時とき不こ
破裂はくわく一いつ手てを害がいする變へんありしもあれ城じやう處ち置ちする變へん
宜よろ不こ適ていすられば能よく其その用ようを為なす瘡そうもも然しかり牛瘡ぎゅうそう

我われ以も多おほ預よ防ぼうするも其その法はふの善ぜんあり者もの不こく無む益えき不こ
思量しゆりやうを苦くるむら者もの不こ非ひ丈さか丈さか瘡そうは時ときは寒かん暑しょ不こ拍はくつらむ
者もの不こ流なが行かうは故ゆゑ不こ時とき氣きは不こ快くわいありしも免まれず變へんを得えむ
まら他た不こ繁はん劇げきは變へんありしも顧かへるる變へんを得えむ牛瘡ぎゅうそうは時ときを
相あ互ひ行かう不こ故ゆゑ不こ甚し便べんなりしも牛瘡ぎゅうそうを施せはら後のち不こ牛瘡ぎゅうそう
を贈くわさすむ言ことは四大洲しやうだいしゅう中ちゆうにありしも其その法はふは親せありしも吾われ
多く牛瘡ぎゅうそうを種う名なするも未ま牛瘡ぎゅうそうを見みむ若ごとく是この如ごとく
言ことは延のびらるも其その法はふは人ひとの體たい造ぞうありしも若ごとく是この如ごとく
法はふは以も瘡そうをのぞく瘡そう夾かより來きる故ゆゑ不こ瘡そう夾かは法はふを以も
多おほく不こ流なが行かうの如ごとく其その法はふは宜よろきらなり若ごとく歎あ歎あ神かみは惡わるむと

言の神変祭禮不用なる故と札守を書く墨筆の何
 此皮と膠を先施用むる蓋歎類神に悪む所や言ふ
 別々説りしは此牛痘法通く世に於て必其喜ぶ所
 陰瘡全く止みし諸神に氏子必蕃殖まじし然れども
 法は流布し神の悪む所ありて必其喜ぶ所
 新く一旦此法を施す小敷人の嬰兒をその家小
 不者を取漿小定期のち此日を失へる或は假
 を生ずる変ある小周て形り而して多し此痘
 膚を痛ましむるや此痘を見ざるは或は
 醫者此為其所を傳聞せし者なり種牛痘

針刺小ありし摩捺せしは厚きほど形り故に
 を施す小兒此眠全く寤先づり且これ貴
 人此身不施すも絶小敷此痘生ぜしむる乃輕候
 我以予彼此生命我害す終むるに難変不易む
 此痘を以て便利ありて変はくおれ我君不勸むる
 此痘を以て拒み終小君を陰瘡の為小夫亡せしむる
 此痘を以て不忠のんぞや若今日此痘を以て是れ
 知るも七行不事あるトいふ君不忠を為さむや
 此痘を以て不諂諛と言はむ其変を畏れず為さば

上二五

〇一四

親不孝を為さむと云はれども人小矯飾と言はれむと云はれ
顧るも止先むつかくてを一変成も為らむと云はれ目を送
りぬと云はれ子の病み多しむ不業成と興へばらむ
う若葉を喫へむゆを世に人の謂へば所は天命不妻
一因縁不歸を成者みをわらむかくは如くあり良法
成信受せむと云はれ子の成險瘴の爲不夫を實不業
因は所爲と云はれ

○蓋人善は善あるを知らず行はざる者あり世にあり不
聖経より云はれ先づのやう卑近は教ふもこれ成行
へば世に益あるを明あるのを云はれ不世に教ふ

後ハむやむを成に存養省察は爲不許多は心力と時
目を費す以多と云はれ成難変と云はれ多畏むを就うばらむ
世ふ多しと云はれ牛瘡の如きを成はれ善成認むれば直不
成ふはみありて成後一些は煩勞ふく成はれ嬰孩成
保全を成はれ功まはれ大形なり
○今善のふはれ險瘴を成必救治するは醫善を麻面を
も愈やむは人有多世に効的實ありば人毛と云はれ奇
ありと云はれ自己も成はれ技不繕らむ成牛瘡をこの二を
未然不防と云はれ以多世の効業ありと云はれ人成
と云はれ因て賣名射利の徒と爲し成はれ効を疑ふは因

三豆

〇十五

者以令枝小誇るとする者々將小災災ありむを知らず
 薪を役せよと言ふ者ハ謝せよとせよ一令其れ既小災也
 新小玉り令救へば者々厚禮せられし如く牛痘既
 絶せよ人小さま令小思ひねば一令常痘既治するを人
 此神明の如く一思ふふ如く造橋は恩を知りて
 負ひ多し涉り多し感徳ト太陽は恩を知りて一令燈
 を借り多し感徳ト一令其れ類小令其れ大相去りて
 甚遠一吾古令其醫方中不於其末仁術の大ありて小
 過其者あり其れ先世故小世人及び朋友は毀譽を顧み
 一令敢てこと其れ其れ者々とわが為あり

世人牛痘を種名むとす小
 必其れは醫法擇ぶ處事

○凡以のむり其善悪も其れ初人の為小拒まねて其
 り難き世は事ありて利ある者大率弊ありて其を
 免れず其れ弊以令利を掩ふ小善者も自然の
 勢あり然れども善惡利弊の論終小定まりて善悪其
 世より行ふ如くも其れ必然其變あり其れ牛痘の如き
 其利多く一令弊少一弊多其害の醫人其活計なき小
 國みらむ牛痘を借りて糊口は資と一草率其變を
 了し針刺して嬰児を啼う其或ハ痘苗其枯散する

ハリス
 フサ
 ナ
 ナ

真牛痘 九百七十四人

假痘 三十七人

發せざる者 六人

再接種して發せざる者 四人

一類發症者之文 此數元を數する其發する變候亦一類形を以て其未全を疑ひ亦數點を以て再發する變あり

自然痘係發症者四人 此症は之を輕痘ありて多くは此年不發して

此種痘前後二三月之間已不自然痘小感者者あり一人は發せず

此年多く發症者あり其自然痘多し牛痘は奪はれて滅却する變あり

假痘を發症者亦再種せざる一人も生ずる者あり 此數減りて

此の救ふ其生ずる所假痘ありといふも再種を病自然れ亦此

自然痘小感其變を恐れ二三年以後再種を其變を約す

種痘書目

一新訂牛痘奇法 西洋 鄭崇謙 刊

一引痘新法全書 京都 廣瀬元恭 校刊

一同翻刺并附録 清 邱喜浩 川 著

一小兒全書種痘篇 京都 小山有造 補

一牛痘約説 東都 榑齋宇田川先生 譯

一工斯牛痘篇 同 誠軒坪井先生 譯

一三名哲牛痘法 同 青池林宗 譯

一濟生備考 同 伊東玄朴 譯

一 杉田成郷 譯

一 散花錦囊

浪華

緒方浩庵譯

一 謨私多附錄牛痘篇

東都

坪井信良譯

一 牛痘新書

讚州

有馬攝藏譯

一 痘瘡かゝく傳

平安

鳩居堂蓮心印施

嚮家君玄真有種痘新編之著其說人痘種之功丁寧周至愚受家君之教有年焉今得牛痘種可謂機契緣熟故不揣不肖敢為此說以使人知繼述之意且有家傳焉

桑田和立齋謹識



Handwritten mark at the bottom right of the right page, possibly a signature or initials.

